

目的 高齢化社会当来の言葉が聞かれるようになって久しい。多方面でもこの問題を見無視して通れないことが具体的に浮上しているのが現状であろう。国および地方自治体の高齢化社会対策も進みつつあり、またビジネスの対称としていところも増えて来ている。しかし、我国の高齢化のテンポは諸外国と比べて極めて早く、欧米の3～5倍数の超スピードでかけ上がっている。この急速に変化している高齢化社会の現状と意識は、大幅にずれを生じているのではないだろうか、数年前まではシルバーあるいはお年寄という画一的なイメージがあったが、現在のシニアは生き生きはつらつと長寿社会をエンジョイしている人が多くなったように思われる。今65歳以上を画一的なシルバーとしての捕らえ方のみではなく、発展の可能性のある能力を保持し能動的な層と肉体的精神的に大きなハンディキャップを背負いながら生きている層の二層に別けて考えなければならない段階に入っているのではないと考える。そこで現在福岡市内の65歳以上の生き生きシニア達にフィットした衣生活がなされているのか調査をおこなった。

調査方法 福岡市内65歳以上の女性80名を対象とし、1989年11月質問紙による街頭での聞き取り調査を実施した。（有効回収率 100%）また福岡市内のメーカーおよび売場の調査を1990年1月上記と同じ方法でおこなった。

結果 女性シニアの意識の中には常に自分が実際の年齢より10歳若い意識があることがわかった。また93%のシニアの女性は自分の服は自分で選んで購入し、89%の人がデパート・専門店で購入しているが市場に対する不満が多く現れていることがわかった。